

中村学園大家政 ○土屋 頼子
山下 歌子

1. 現代は核家族家庭が逐年増加している。厚生省調査によれば一世帯の子ども数は、昭和38年では2.3人、39年では2人、昭和44年では1.8人であり漸次減少している。しかし、一世帯あたりの平均子ども数が1.8人であることは、一人子が少ないことを意味している。退行現象は幼児期に下に弟妹が出生し、親の態度が適切でない場合上の子どもに現われる。幼児期は情緒発達が著しく、人格形成の基盤期といわれ重要な時期であるので、円満な情緒発達が望まれる。親は子どもの健全育成をはかるための責任があると考え、演者らは母親の認識度の実態を把握するために本調査を試みた。

2. A大都市、B中小都市、C農村地区、計445名の幼稚園児の母親を対象に質問紙を配布し、自己記入を依頼した。調査時期は1969年6月28日～7月15日であり、回収率は88.5%であった。調査結果は χ^2 検定を用い有意性の有無を調べた。

3. ①退行現象ということばを知っていたものは全体で60%弱であり、その習得経路は、テレビ・ラジオ25%、新聞・雑誌22%、育児書14%であった。②退行現象の意味を理解していたものは全体で25%にすぎなかった。③退行現象が現われやすい年令を理解していたものは39%であった。④退行現象が現われた場合望ましい処置の仕方を理解していたものは46%であった。